



米原市醒井地区の
「居醒の清水」

地域でのフィールド調査・研究の情報

水を介した人々の暮らしと湖

主任学芸員 楊 平

湖と人との関係を知ろうとすると、湖辺住民の水利用の実態を知ることが大切です。特に、上水道以外の水利用の実態は、それぞれの地域の自然や文化がそこに内包されている貴重な資料でもあります。

日常的に湖を目にしている湖辺住民は湖の水に依存していると考えられがちです。ところが実際に世界各地の湖をみると、意外と湖の水以外の水を利用していることが多くあります。最も多いのが湧き水の利用で、次いで湖に流入する小川の水利用、そして井戸水利用などです。琵琶湖周辺の村落においても、かつていたるところで数々の井戸や湧水が利用されてきました。

琵琶湖と同様に、中国の太湖周辺たいこの村落におい

ても、多くのさまざまな井戸が愛用されてきました。これらの井戸は、いくつかの共同井戸と個人の敷地内の井戸に分かれます。現在、多くの村落において、各家に水道がありますが、飲用、野菜洗いや洗濯などの生活用水はほとんど井戸に頼っています。古い共同井戸を使っている人から話を聞くと、その水は温度の変化が少なく、冬でも温かい水で、洗濯が楽であるといいます。それらの井戸は、100年以上の歴史を持っているとも伝えられています。

このような水を介した人々の暮らしのありようを探り、私たちの身近にある湖を取り巻く「故郷ふるさと」の魅力について、新たに思いを馳せる機会になればと考え、「魚米之郷ぎよまいのさと」—太湖・洞庭湖



写真1 太湖湖辺の水郷風景



写真2 夕暮れの太湖

と琵琶湖の水辺の暮らし」と題した企画展示を開催しました（開催期間：2014年7月19日～11月24日）。

企画展示の内容については、主に「第1部 湖と暮らしー長江文化と日本列島」、「第2部 水環境と知恵ー水文化にみる湖との暮らし」、「第3部 魚と湖ー漁にみる湖との暮らし」、「第4部 米と湖ー農にみる湖との暮らし」という4つのテーマを取り上げ、湖と人々の暮らしについて見直してみたいと考えています。第1部では、中国一の大河とそこにある太湖・洞庭湖を紹介し、琵琶湖の生活文化とのつながりを見出そうとするものです。第2部では、水郷や水辺の暮らしにみる水利用とその工夫から、水環境との付き合い方について考えようとするものです。第3部では、家船漁民や漁具のERI、食文化を通じた日本列島との関係を探り、琵琶湖漁業の変遷をたどるものです。そして、第4部では、琵琶湖の湖辺で行われている「魚のゆりかご水田」にもよく似た現代中国の水田養魚について紹介します。

このような企画展示を通して、琵琶湖の様々な生活・生業を取り巻く「湖の文化的価値」を再発見し、多くの方々との交流ができればと考えています。この企画展示をご覧になっていただき、様々なご意見を寄せていただけることをお待ちしております。



写真3 100年以上利用されている井戸



写真4 家船漁民の水上集落

中国で生まれた景色を滋賀で楽しむ～彦根城・玄宮園～

上席総括学芸員 用田政晴

彦根城の北麓の内堀と中堀の間には、^{けやきでん}楓御殿と呼ぶ彦根藩の下屋敷があり、そこには池泉回遊式という形式の^{けんぎゆうえん}大名庭園・玄宮園が知られています。

国指定の名勝、つまり「景色の重要文化財」になっているこの庭は、江戸時代のはじめごろ、延宝5年(1677年)に彦根藩第4代藩主である^{い い なおおき}井伊直興が整備したといわれています。中国・湖南省の洞庭湖にあったという唐代玄宗皇帝の離宮を参考にして、一説によると洞庭湖周辺の景色のいいところを集めた^{しょうしゅうはつがい}「瀟湘八景」を「近江八景」におきかえて造った庭とも伝えられています。そして、その名前は中国の宮庭庭園を指す「玄宮」に由来するようです。

日本では約500年前の室町時代に、中国の瀟湘八景をモデルにして、琵琶湖を洞庭湖に見立てることがはじまりました。玄宮園が造営された後も、江戸時代の終わりごろには、^{かつしかほくさい}葛飾北斎・^{うたがわひろしげ}歌川広重などの浮世絵師は、近江八景をよく描きました。特に、広重の錦絵による『広重近江八景』は代表的な作品で、天保5年(1834年)ごろに刊行されたものです。



玄宮園から彦根城を望む

近江八景は下記の通りで、たとえば「石山の秋月」とも呼びますが、本当は旧来の「の」は記さないで読むようです。

石山秋月(石山寺) 勢多夕照(瀬田唐橋) 粟津晴嵐(粟津原) 矢橋帰帆(矢橋) 三井晩鐘(三井寺(園城寺)) 唐崎夜雨(唐崎神社) 堅田落雁(浮御堂) 比良暮雪(比良山系)

これらは大津市と草津市に集中しており、今では車を使えば何とか一日で回れますが、彦根城を訪ねたついでに玄宮園に足を延ばすと、1時間もあれば中国由来の日本の風景が楽しめます。

平山城の彦根城天守を借景にして、中央の池には4つの島と9つの橋が配され、^{りんちかく}臨池閣、^{ほうしょうだい}鳳翔台、^{ぎょやくしやう}魚躍沼、^{りゅうがばし}龍臥橋など「玄宮園十勝」と呼ぶ建物や橋などがあります。ぜひお訪ね下さい。



玄宮園内図



ふるさとに生きる
メタセコイア

琵琶湖の湖周道路や烏丸半島の入口の並木でたくさん見ることができる、メタセコイアの木。数百万年前の古琵琶湖の時代には琵琶湖の周りに多く生育していたものの、その後の環境変動で消滅してしまったことが化石の研究から明らかにされています。

湖南省の研修生として琵琶湖博物館に在籍していたこともある曾志新博士にメタセコイアを案内していただくため、長沙市にある森林植物園を訪ねました。じつは洞庭湖の周辺には、現在でもこのメタセコイアが自然の状態で見えている場所が残されています。1941年に三木茂博士によって化石種として認定された4年後に、洞庭湖の北に位置する湖北省で生きているメタセコイアが発見されました。この地域は、生きている化石であるメタセコイアのふるさとなのです。



曾博士(左)と
著者(右)

【資料裏話 その13】「洞庭秋月」と「石山秋月」の絵皿

上席総括学芸員 用田政晴

中国・湖南省には、「近江八景」のもととなった洞庭湖周辺の「瀟湘八景」がよく知られています。宋の時代からこの景観を画材に山水画が描かれ、それぞれ瀟湘夜雨、平沙落雁、烟寺晚鐘、山市晴嵐、江天暮雪、漁村夕照、洞庭秋月、遠浦帰帆と呼ばれました。

2013年は、その湖南省と滋賀県の友好提携30周年にあたりましたが、湖南省から友好の証として送られたものの中に、2枚の大きな絵皿があります。「洞庭秋月」と「石山秋月」と題するもので、現在は知事公館にあります。7月から開催する企画展示『魚米之郷』では、これらもぜひ展示したいと考えています。



● 編集後記 ●

「山を覗けば水を知り、水を覗けば暮らしを知る」日本に限らず世界中に通じること。歴史がそのことを物語っていると思います。名前に“水”がつく編集委員が担当になりました。今後も様々な角度からお伝えします。また、ご紹介いただける情報をお待ちしています。(不熟)

鳥の目 魚の目 クイズ

● 「企画展示のタイトルは？」 ●

琵琶湖の周辺では、「水郷」という言葉をよく聞きますが、7月19日から開催される企画展示のタイトルにあった言葉は？

- ① 水郷
- ② 魚米之郷
- ③ 白川郷

答えは、紙面のどこかにあります。

◆ 巻頭写真の説明 ◆

米原市の地藏川につながるこの「居醒の清水」は、「平成の名水百選」に選ばれ、毎年、多くの人々を魅了しています。夏頃になると、清らかな水の流れの中に白い花を咲かせるバイカモ(梅花藻)も見られます。